

アイヌとニヴフのシャマン伝承

丹菊 逸治

1. はじめに

サハリン島では日露両国の進出までは、北半分にニヴフ民族、南半分にアイヌ民族が主要民族として居住していた。またウイルタ民族、エヴェンキ民族も両者に比べれば少数であるが、トナカイ牧畜などをして居住していた。現在のサハリン州はロシア系住民が圧倒的多数を占める。1990年の調査ではサハリン州の全人口約71万人に対してニヴフ人2008人、エヴェンキ人188人、ウイルタ人129人となっているが、母語保持率は半分以下と低く、文化的にもロシア化が進んでいる⁽¹⁾。アイヌ人は1946年(引き揚げ直前)の調査では1159人、戦後サハリンに200人以上が残留していたという⁽²⁾が、現在はアイヌ人を自称する人々はごくわずかである。日露両国の勢力争いによってサハリンがいわば分割されて以降は、ニヴフ民族はロシアの、アイヌ民族は日本の影響下におかれ。しかもサハリン全島がロシアの行政下にあり、サハリンからアイヌ民族が日本に「引き揚げ」てしまつた現在では両民族間の結びつきは強いとはいえない。しかし、つい数十年前まではお互いの交流は活発であったし、政治的にもさまざまな道が模索されていた。特にアイヌ、ニヴフ、ウイルタの3民族の間にはかなりの交流があったようである。ウイルタ人は少数ではあるが、牧畜のために拡散して住んでいた。彼ら3民族は日露戦争の混乱時にも連絡をとりあつていた⁽³⁾。エヴェンキ人に関しては西海岸北部に居住していたためか、他地域のニヴフ人や、南部に居住していたアイヌ人はあまり情報をもっていなかつたようである。本稿ではノグリキ、チルウンヴド、ポロナイスクでのシャマンに関する口承伝承にみられる、主としてアイヌ・ニヴフ両民族の相互交流の痕跡を指摘したい。

2. 問題提起

2-1 シャマニズムの現状

かつてサハリンの諸民族の間ではシャマニズムが盛んだった。シュテルンベルグ、ピウスツキらはかなり困難な病気治療についても触れている⁽⁴⁾。シャマンはアイヌ語ではトゥスクル、ニヴフ語ではチャム、ウイルタ語ではサマと呼ばれる。本稿ではそれらをことさらに区別するとき以外はシャマンと呼ぶことにする。ニヴフ文化においてはシャマンによる病気の治療等にはかなりの謝礼が支払われており、その重要さが推測できる。例えばノグリキ近郊では犬やトナカイを飼っている人はいちばんいい犬、トナカイを代償とした。服などの財産がある場合は一番いい服を代償としたという⁽⁵⁾。

しかし、現在ではサハリンにおいてシャマニズムはおとろえ、ほとんど見られない。いうまでもなく近代化による伝統文化の喪失のひとつであり、またロシアにおいてはソ連政権による弾圧、日本においては「引き揚げ」による共同体の崩壊なども大きく影響しているだろう。ニヴフ人が巫術に用いていたカス(片面太鼓)などの道具も今ではむしろ伝統音楽サークルの楽器として使われている⁽⁶⁾。実際にサハリンのシャマニズムがいかに行われていたか、というのは極端にいえばすでに歴史研究の対象である。

2-1 シャマンへの視点

ソ連崩壊後のナショナリズムの高まりとともに、ユーラシア各地でシャマニズムの再評価が行われつつあるようである。アイヌ文化にせよニヴフ文化において現在ではシャマニズムが実践されていない以上、新たな資料は聞き取りに頼らざるを得ない。しかし聞き取りの際には必ずしも直接の見聞が語られる

わけではない。病人の治療について語られる場合もあれば、天から石を降らせる超自然力について語られる場合もある。いわば現実と想像の両方がないまぜになって語られる。しかし両者に共通しているのはアイヌ人・ニヴフ人本人たちの目を通して語られているということである。その点ではかつての民族学者の証言こそが外部からの異質な視線である。かつて民族学者は外部からの客観的な視点を守ろうとしたし、実際の治療効果の研究においてはまさに客観的・科学的事実こそが重要だろう。どの薬草を用いるのか、どの儀式でどの方法を用いるのか、などを無視することはできない。しかしそれらの記述からは一般のアイヌ人・ニヴフ人らがシャマンをどのようにみなしていたか、はなかなか窺い知ることが出来ない。

3. シャマン伝承

本稿では、実際のシャマン像ばかりではなく、アイヌ・ニヴフ両文化の口承伝承中のシャマン像に注目し、そこにしばしば他民族のシャマンが登場することを指摘する。ここでは便宜的に、研究者以外のアイヌ人・ニヴフ人の間で伝えられている、シャマンに関する話を「シャマン伝承」と呼ぶことにする。ニヴフの場合それらには(1)トゥルグシュ(「昔話」。現在ではフィクションと目される)、(2)ケシュ(体験談や目撲証言など。ケシュは単に「話」という意味である。事実として語られる)の二つが含まれる。同じことがアイヌに関してもいえる。話のジャンルとしてはウチャシコマ(「故事来歴譚・実話」)となるだろうが、ニヴフにおけると同じく(1)昔から伝えられている話(口承文学テキスト)、(2)自分の見聞した話(体験談)、の2つに分けることが出来ると思われる。ただし後述する通り、この区分は当事者にとって本質的なものではない。

3-1 現在のシャマン伝承

以下ではシャマンに関する直接の見聞もしくはそれに類する事例(=体験談)を紹介する。ニヴフ、アイヌ両文化において、シャマンについて現在聞くことのできる証言である。

3-1-1 現在のニヴフにおけるシャマン伝承

以下の事例は1999年から2002年にかけての聞き取りによるものである⁽⁷⁾。現在70~80歳代の方々はニヴフ語の運用能力も高く、伝統文化に関する造詣も深い。

事例 1 チルウンヴド近郊出身。80歳代の女性U・T氏の体験談

チルウンヴドはトゥミ川の上流に位置する集落である。その周辺地域は次に述べるノグリキ周辺地域

と伝統的に交流がある。U・T氏は同地域でも最長者の伝承者である。

体験談「父がチャムだった(自分自身はチャムではない)。チルウンヴド近郊の大火灾の際、父は太鼓を叩いて祈り、風向きを変えてニヴフ人の集落を救った。」

伝承「チャムはいろいろなことができた。縛っても縄がほどけてしまう。川に沈めて殺した(?)話がある。」

事例 2 トゥグムチ出身。70歳代の女性T・N氏の体験談

現在、ノグリキには伝統的な「チャム」はない、とされる。同地区でも知られた伝承者であるT・N氏は近郊にあった集落トゥグムチの出身だが、「チャム」についてはよく知らない、という。

体験談「トゥグムチ、ダギにはチャムはいなかった。近くにウイルタ人が住んでいたが、彼らに当時チャムがいたのかどうかは知らない。ただ、ウイルタ人のシャマンに関するトゥルグシュは聞いたことがある。」

伝承「チャムは重病で死にかけている人を治療することができた。また死んだ人を生き返らせることすらできたという。」

T・N氏は死者の村へ行って生還した人の話を伝えている。また、ノグリキでは死者に会ったという話がいくつか伝えられているようである。しかしそのいずれにもシャマンは関与していない(ポロナイスクで採集された類話にはシャマンが登場するものもある⁽⁸⁾)。

前項でふれたチルウンヴド近郊の火事に関してはT・N氏は次のような話を伝えている。「チルウンヴド近郊にあった村々でかつて大火事があった。ロシア人の集落はみな焼けてしまったが、ニヴフ人の集落だけは焼けなかった。火は二手に分かれてニヴフ人の集落を避けて通った。それは我々が常々大地(ウグミフ)を大切にして挨拶を欠かさなかったからだ(ニヴフ人は大地を傷つけてはならない、自分の住んでいる土地以外の場所へその年初めて行ったときは、大地に酒と食べ物をささげて挨拶をする、という)。大地はそこがニヴフ人の集落だと知っていて避けたのだ。」

なお、ノグリキにも実際にシャマンはいたし、シャマンに関する伝承も採録されている。サンギのテキストはその多くがノグリキ周辺で採録されたと考えられるが、以下のような伝承も含まれている。

テキスト 1 (梗概)

「シャマンの女性に7人の息子がいた。別の女性に1人息子の若者がいた。若者の留守中にシャマンの息子たちがその薪を燃やしてしまった。仕方なく灰を捨てに行った彼はエヴェンキ人商人と出会い、持つ

ていた海の幸と毛皮を交換する。村へ戻った若者はシャマンの息子たちに「灰と毛皮を交換した」と言う。シャマンの息子たちは自分たちの薪をすべて燃やし、灰を持ってエヴェンキ人のところへ行くが何も手に入らない。怒ったシャマンは若者の母親を殺す。若者は母親を火葬しに行き、犬ゾリと出合う。持っていたわずかの毛皮と大量の海の幸を交換して帰る。村へ戻りシャマンの息子たちに「ウイルタ人のところへ死体を持って行けばよい」という。彼らは母親のシャマンを殺し、その遺体を持ってウイルタ人のところへ行くが、追い払われる。怒った彼らは若者を縛り上げて湖に沈めに行く。途中逃げ出した彼は先回りしてシャマンの息子たちを出迎える。「湖の中に女性がいて君らを待っているよ」というと、彼らは湖に飛び込んで死んでしまう。」⁽⁹⁾

3-1-2 現在のアイヌにおけるシャマン伝承

以下の事例は1999年に北海道内で行った当時60歳代後半から80歳代までの方々(つまり多くの場合幼少時をサハリンで過ごした)からの聞き取りによる。

事例 3

鶴城(現オルロヴォ。ウグレゴルスク市区)出身。60歳代の女性T・S氏の体験談。

「トゥスは専門にやる人がいた。トゥスをするときは腰帶をつけカチョ - 「太鼓」を使う...」「トゥスによって憑きものは落ちるが、結核などの病気は治らないだろう」⁽¹⁰⁾

事例 4

新間(現ノヴォエ。ポロナイスク市区)出身。80歳代の女性T・Y氏の体験談。

「新間で、トゥス *tusu*[巫術]をするのはK氏の妻だけだった。」「トゥスクル *tusu kuru*[巫術をする-人]にはコシンプ *kosimpu*[憑き神]というものが憑いている。これは、トゥスクル *tusu kusu*だけに憑いているものだ。キツネやクマなどが憑いているという。」⁽¹¹⁾

事例 5

白浜(現スタロドウブスコエ。ドリンスク市区)出身。70歳代の女性T・A氏の体験談。

「トゥス「おはらい・厄ばらい」風邪、腹痛み、その他病人が出たときにそれを治すためにやる。」⁽¹²⁾

3-2 口承文学テキスト中のシャマン

次に、体験談(直接の見聞)ではない伝承の事例をあげる。前述したとおり、この区別は語り手当事者にとって重要視されているとは限らない。特に、アイヌのウチャシコマ、またかつてのニヴフのトゥルグシュ(の少なくとも一部)は原則として事実と信じられていたと考えられる。シャマンの行う巫術らし

いモチーフ、ということであればどのジャンルにもみられる。参考までに両文化の口承文学ジャンルを示す。

口承文学のジャンル分類⁽¹³⁾

サハリンアイヌ口承文学

ハウキ(叙事詩): 節をつけて歌われる。一晩で終らない長編もある。

オイナ(神謡): 節とリフレインをつけて歌われる

トウイタハ(昔話): 散文で語られる。歌が含まれる。

ウチャシコマ(故事來歴譚): 散文で語られる。一部はかつて節つきで語られたらしい。

サハリンニヴフ口承文学

ンガストゥシユ(叙事詩): 節をつけて歌われる(一部は散文で語られる)。散文で語られることもある。

トゥルグシュ(昔話): 散文で語られる。

ケシュ(体験談、言い伝え): 散文で語られる。単なる「話」の意。

3-2-1 アイヌ口承文学テキストの事例

テキスト 2 (梗概)

ジャンル: オイナ 採録年: 1943年 採録地: 多蘭泊(現ホルムスク近郊) 語り手: 当時50歳代後半の女性N・R氏。

「化物(オヤシ)が子供の魂を盗みだし、背負って逃げた。ヤイレスプはきれいな鳥に変身して追った。子供(の魂)は鳥を射る弓矢を欲しがった。化物は子守唄を歌ってなだめようとしたが子供は泣きわめいた。ついに化物は子供に弓矢を作つてやった。子供は鳥を射ようとする。ヤイレスプ(鳥)は避けながら追いかける。そのうち昼になってしまったので化物は地中に潜った(化物は昼に弱い)。ヤイレスプは魂を捕まえて戻り、死んだ子供の身体に戻して生き返らせた。」⁽¹⁴⁾

テキスト 3 (梗概)

ジャンル: トウイタハ 採録年: 1987年 出身地: 小田州(現パルスナヤ。トマリ市区) 語り手: 当時80歳代の女性A・T氏。

「ハシボソカラスとハシブトカラスがいた。ハシボソはアザラシを獲った。ハシブトがそれをつづいたので、ハシボソはハシブトを雪中に投げ飛ばした。ハシブトの妻は夫を探しに行くが見つからず、その上に小便をひっかけてしまう。ハシブトは怒って家に帰る。ハシボソはハシブト一家をアザラシ料理に招待する。ハシブトは家族には招待に応じることを禁じ、自分がだけが出かける。ハシブトが火にかけられた鍋に飛び乗るので皆は彼を縄で縛る。ハシブトが「縛

よ切れろ」というと縄が切れてしまう。糸や紐で縛っても抜けだすので、ついにハシブトの妻を呼び、その陰毛で縛るともう逃れられなかつた。ハシブトの家族はアザラシ肉を食べ、ハシブトを連れ帰つた。家でハシブト夫婦は喧嘩しハシブトは死んでしまつた。」⁽¹⁵⁾

テキスト 4 (ハウキにおける描写)

ほとんど唯一のハウキのテキスト「北蝦夷古謡遺篇」⁽¹⁶⁾には「トゥス」ではなく「キンラ」という語で巫術が登場する(キンラは現代北海道方言では激情に我を忘れるさまをさすが、このテキストでは金田一の指摘どおりトゥスとほぼ同義と解釈すべきであろう)。小道具として太鼓が用いられる描写もみられるが、登場人物はトウスクル「巫術者」と呼ばれるわけではない。また、登場人物は特に太鼓などを用いずに空を飛んだりするなど、アイヌの叙事詩におなじみの超能力を發揮するようである。

ジャンル：ハウキ 採録年：1907年 採録地：富内（現オホーツコエ。コルサコフ市区）語り手：当時30歳代後半の男性T・C氏

「(神のような若い娘が)シャクトン(=赤銅)の小太鼓を、手に持ちながら、もう片手には、シャクトンの小さなバチを、なんとまあ、太鼓の真ん中に、打ち据えた」(1339行目)

「(神のような若い娘が)サクトン(=赤銅)の小太鼓に息を吹きかけ、手綱の口へ、この5人のパウチ(=魔女)を追いやった。3人のパウチめは、一方の空へ、雲を突き抜けて行き、2人のパウチめは、手綱の中へ、入らせた。」(2337行目)

「これらの、魔女(パウチ)たちが、キンラしつつ空中に飛び上がった」(667行目)

「神のような若い娘が、キンラをおこなうさまは、顔が真っ赤になるほど(中略)。私(主人公)を見て、キンラをするその顔は激しく、はげしい息吹を(私を縛りつけた)流木の上に吹きかけた。私の手を縛った縄は、石のように硬かった。新たにいっそう、強力なキンラを繰り出し、それでとうとう(流木ごと)バラバラに碎きほどいた。」(1947-1967行目)

「キンラをして、キンラによって言うことには『私が聞かされたることによると、遠くシランノッ村の者が今や、はるか昔お前がとり逃がした女をシランノッ村の者が自分の妻としている。そのために仕返しの戦をしかけようとやってくる...』」(2053-2068行目)

テキスト 5 (梗概)

ジャンル：ウチャシコマ 採録年 1902～1905年
採録地：元泊村斑伸(現ヴォストーチヌイ。マカラフ市区) 語り手：当時30歳代の男性I氏。

「ある村の夏の家(冬は空き家になる)に冬の間は化物が住みついていた。冬の夜、2台の犬ヅリがその家

の前を通りかかった。後続のソリを何者が引つ張ってはなさないので、そのソリの持ち主はその家に泊まることにした。家に入るとすぐに化物が男を殺してしまつた。先行していたソリの男が村について人々と一緒に戻つてみると、男も犬も殺されていた。春になると人々はシャマンを3人呼んだ。3人のシャマンは家に入って巫術をしたが、化物も巫術をした。窓から入ってきた神の矢が化物を襲つたが、化物は靴、盆、箱で防いだ。真夜中に偉いシャマンの神が去ると、若いシャマンたちが巫術で化物を攻撃した。太鼓からヘビを出現させ、化物の気をひいている間に、神の剣で首を切り落とし、神の矢で身体を貫いた。夜が明けると化物の体はなくなつてゐたが、血が流れつた。二人のシャマンにはたくさんの謝礼を、偉いシャマンには普通の謝礼をした。」⁽¹⁷⁾

テキスト 6 (梗概)

ジャンル：ウチャシコマ 採録年 1988年 出身地：小田州(現パルスナヤ。トマリ市区) 語り手：当時80歳代の女性A・T氏。

「イチャラ(伊皿)というところに年老いた女性のシャマン(トゥスアハチ)がいた。彼女は頼まれてウシトモナイポで病氣治療をした。その帰り彼女は謝礼にもらったイヌを慣例に反して連れ帰ろうとした。すると帰り道の途中で(魂が)天にのぼつてしまつた。男の子がひとりそれを目撃していたので、後日人々が様子を見に行くと、彼女の遺体、イヌの死骸が浜に残されていた。伊皿には今でもそのシャマンの家と倉(が変じたもの)だという石がある。今でも人々はそこに供え物をする。自分たちも(終戦後日本に)引き揚げるときは酒とイナウで彼女にお祈りをした。それで海上でも天候がよかつた。」⁽¹⁸⁾

3-2-2 アイヌの口承文学の世界観とシャマン伝承

ハウキについては情報が非常に限定されており、そこに現れる「巫術」らしきものをどう解釈すべきかは今後の課題であるが、すでに指摘したように明確に巫術者と呼ばれる登場人物はいない。ヒロインは太鼓を使うが、ヒーローは小道具などなしで超能力を発揮する。

オイナはヤイレスーポという半神半人の存在に関わる内容をもつ。人間が登場することもあるが、基本的には神同士の物語である。そこで行われる「巫術」はいわば神の能力であり、人間であるシャマンが登場するわけではない。トウイタハはより人間的な話を内容としてもつが、そこでは登場人物が非常に類型化されている⁽¹⁹⁾。そこには「シャマン」という登場人物はおらず、動物同士の技比べに巫術らしいものがみられるだけである⁽²⁰⁾。なおピウスツキによればトウイタハは北海道におけるウウェペケレと異なり、フィクションとして語られていた可能性が高い

⁽²¹⁾。一方でむしろウチャシコマの世界観は実際の人間世界と共に通していると考えられる。その多くは実際にあった出来事とみなされていたという。ピウスツキの採集したウチャシコマのうち、シャマンの登場するものは伝承上の地名ルルバ村(実際には存在しない)に関するものではなく、いわゆる歴史的なウチャシコマである⁽²²⁾。なお研究者が直接本人から聞いた体験談もウチャシコマとみなされるらしい⁽²³⁾。そこでは語り手自身の世界観ときわめてよく似た世界観が土台になっている。むやみに主人公が空を飛んだり、1人で敵の大軍団を撃滅したりすることはない。

3-2-3 ニヴフ口承文学テキストの事例

テキスト 7

ジャンル：ンガストゥシュ 採録地：トウミ川流域
採録時期 1890 年代。

(梗概)「人食いに父親を殺された若者が仇を討ち、旅に出かける。旅先で石の家に住む鉄人間と戦って殺す。次にクマの家に行き、クマとその部下のウイルタ人、エヴェンキ人、サハ人、ナナイ人、悪魔らを皆殺しにする。次に偉いシャマンのところへ行く。シャマンは若者に木幣を作らせ、彼の将来を占う。彼はその占いに従い、危機を脱する。彼は戦いを繰り返しながら、旅を続ける。戦いで殺されるが蘇生し、勝利をおさめる。大きな村で妻を得、人形を使って故郷に帰る。母親が死ぬと鉄のトナカイに乗り、海の人との戦いに出かける。海の悪魔に殺されるが、蘇生し勝利をおさめる。さらに天にのぼり天の人たちと戦う。今度は槍で突き殺されるが、また蘇生し勝利をおさめる。故郷に帰ると妻が森の人(クマ)にさらわれていた。クマを殺し妻を取りかえす。人形を使って鉄の家を作って暮らした。」⁽²⁴⁾

(描写例。上記テキストより)

『私は強力なチャムン(巫術者)だ。さあ、あそこへ行って灌木を切って持ってきて、ナウ(木幣)を削り、私に(巫歌を)歌わせよ』 我らが人(=主人公のこと)は行き、灌木を切って持ってきて、ナウを削つて彼に結びつけ、歌わせた。『クークークー、お前はここから行って、強大なウニシュク(化物)の網にかかるてしまうだろう、、、』⁽²⁵⁾

「大きな海のミルク(化物)がナイフで彼を刺した。我らが人はすぐに死んだ。海のミルクは彼を刻んで煮た。食べて、食べ終わると寝床に横になって寝た。(化物が)寝て起きて、見ると、我らが人は蘇生して立ち上がっていた。」⁽²⁶⁾

テキスト 8 (全訳)

ジャンル：トルグシュ 採録年：1928年 採録地：敷香(現ポロナイスク) 語り手：当時 30歳代の男

性 K・M 氏。

「シーデレ・シケンガヌという金持ちがいた。彼は西海岸へ出かけた。旅行中にひどい病気になった。シャマンに治療してもらい、治って生き返った。シャマンは言った。「気をつけていなさい、まちがいがあるかもしれないぞ」と言った。自分の村へ帰った。そして春にアザラシを獲りに行った。5人漕ぎの船でアザラシ狩に行った。アザラシを獲りに行って帰ってきた。自分の村に帰ると、その船が真ん中から割れて2つになった。2つになってみんな死んだ。一人だけ泳ぎ着いて、身の上を語った。」⁽²⁷⁾

3-2-4 ニヴフの口承文学の世界観とシャマン伝承

ンガストゥシュはニヴフ人の語り手本人のものとはかなり異なる世界観を持っている可能性が高い。少なくともンガストゥシュの主人公はただの人間ではない。ンガストゥシュに登場するシャマンは太鼓を使って占いをするなど、実際のシャマンと同じような行動をとるが、主人公はそれ以上の力を持っている。しかも太鼓などを使わずにその力を発揮するなど、明らかにシャマンとは異なる存在であるらしい。この点でアイヌのハウキとよく似た特徴を示す。通常人間を越えた存在とみなされる「山の人(=クマ)」や「海の人」「天の人」「地の人」らに襲いかかり、打ち破ってしまい、最後にはみずからミルク

(「怪物」)として地の底で暮らす場合もある⁽²⁸⁾。ポロナイスクで高橋盛孝が得た情報では「他のnga?tundを参考にし、全部創作するかまたは改作、つぎ合せなどして作る。」⁽²⁹⁾という。この「全部創作」というポロナイスクでの証言は極端であるにしても、かつてのンガストゥシュは他のジャンルとは異なり、ある程度フィクションとみなされていたようである。このジャンルの主人公の能力は人間としては桁外れである。サハリンアイヌのハウキ、オイナにおけると同様、超自然的な主人公だからこそその能力とみなすべきであるが、話中では「人間」とされているのである。一方でンガストゥシュに登場するチャム自体の行う巫術は現実のチャムのものとほぼ同じようなものである。つまり、少なくともンガストゥシュの主人公は語り手ら並の人間とは異なる存在である、とみなすべきである。つまり、同じく「人間」と呼ばれていても、トルグシュやケシュに語られる普通の人間とは異なる。

トルグシュにもチャムが登場するが、このトルグシュはかなり広い内容をもつ。動物同士の由来譚など、遠い昔(現在ではあるいはフィクション)の出来事から、ロシア人や日本人が登場するものまで多様である。しかもアイヌのトウイタハと異なり、明確な形式的な特徴をもたないため、そもそもトルグシュなのかどうか、残されたテキストからは不明な場合が多い。ただ、本人の実体験談はトルグシュではなく、たんにケシュ「話」と呼ばれる(マハト

シュ「実際・本当のこと」とよばれることもある)。トゥルグシュの世界観は、必ずしも語り手本人の世界観とかけはなれたものではない⁽³⁰⁾。それは現在でも同様である。例えばT・N氏の伝承するトゥルグシュに登場する「キツネが化けた人間」というものは実際に存在するといわれている。つまり基本的にはトゥルグシュの世界観は語り手自身のものとほぼ一致する。ゲオハトが登場するなど他民族から聞いた話であり、結果的に異なる世界観がベースになった話は舞台が他国になっているようである⁽³¹⁾。たとえばゲオハトの話には人間のウズング「支配者」が登場する⁽³²⁾。「支配者」はテキストがニヴフ語以外の言語で語られたもののは場合はツアーリ、天皇などと呼ばれ、外来性が一層鮮明となる。このトゥルグシュというジャンルに登場するチャムは動物に変身するなど超自然的な力を発揮するにしても、限度がある。天にのぼって天の人と戦ったり、海の悪魔たちを皆殺しにしたりはしない。死んでたたりをなすことはあるが、不死ではない。

3-2-5 世界観の一致

以上みてきたとおり、シャマンが登場する伝承(シャマン伝承)と、巫術らしい超能力が登場する伝承はあるていど区別しうる。便宜的に区分した(1)昔から伝えられている話、(2)自分の見聞いた話、の2種がともに前者(シャマン伝承)に含まれる。シャマン伝承は語り手の世界観と基本的には一致しており、かなり均質なデータが得られるものと考えられる。

3-2 口承文学にあらわれる他民族のシャマン

複数の民族がが隣り合って居住するサハリン地域では口承文学にも他民族が登場する⁽³³⁾。複数の民族がかわることもある。例えばアイヌとウイルタの間の戦いの話などである。そういうなかに他民族のシャマンが登場する話がある。たいていの場合は、他民族のシャマンは敵対的な存在である。もっともシャマンは口承文学中では自民族相手にも悪さをするので、必ずしも他民族を特に標的にしているわけではない。以下では他民族のシャマンに関する伝承をみていきたい。例えばニヴフにはアイヌのシャマンの話、ウイルタのシャマンの話などがある。

3-2-1 ニヴフの伝承における他民族シャマンの事例

テキスト 9 (梗概)

採録年: 1939~1946年 採録地: 敷香(現ポロナイスク) 語り手: 当時 40~50歳代の男性K・M氏。「ニヴフのウンデガント、ウイルタのドゴドガノというシャマンがいた。彼らはさらに二人のニヴフのシャマンと一緒に鳥に変身してアイヌ人の集落へ行

き、ある男の食べ物に毒を入れた。アイヌのシャマンが原因を探ったがわからなかった。翌年をとったアイヌ人女性のシャマンが来て見破り、4人のシャマンは2組に分かれて逃げた。アムール地方まで逃げたが、そこで巫術を破られ、いつのまにかアイヌ人の集落に戻ってきてしまっていた。ついに逃げ切れず二人は謝った。」⁽³⁴⁾

テキスト 10 (梗概)

採録年: 1939~1946年 採録地: 敷香(現ポロナイスク) 語り手: 当時 40~50歳代の男性K・M氏。「ウイルタ人のヤルルバとアイヌ人のホトクチとがウイルタ人の子供を連れて北知床半島に行った。テントを張って獵に出かけた。獵から帰ると子供が死んでいた。夜死体の番をしていると、火の玉や獣が次々に現れ、最後にトドが現れ、死体を襲って食べ始めた。子供の魂が悲鳴をあげた。待ち伏せしていた二人は銃と銛でトドを攻撃した。トドは海に逃げ込んだ。冬になって白浦のアイヌ人シャマンが北知床での事件は自らが犯人だと告白して死んだ。」⁽³⁵⁾

テキスト 11 (全訳)

ジャンル: トゥルグシュ 採録年: 1928年 採録地: 敷香(現ポロナイスク) 語り手: 当時 30歳代の男性K・M氏。

「アイヌのシャマンが敷香(現ポロナイスク)の日本人たちのところに来た。そこでシャマンをやっていた。彼は酒飲みだった。日本人に巫術を見せては代わりに酒をとって飲んでいた。あるときシャマンが日本人をからかったので喧嘩になり、日本人たちは彼を縛って川に投げ込んだ。抜け出てしまつたので再び捕まえ、今度は網でくるんで溺れさせた。それ以後、彼のせいで敷香の川を通る日本の船が何隻も破壊された。」⁽³⁶⁾

事例 3

U・Y氏(前出、80歳代の女性。)が子供の頃(1920年頃か?)の体験談。

「チャイヴォには南から漁師たちが来ており、そのなかにアイヌ人女性のチャムがいた。名前は知られておらず、ニヴフ人は彼女をただクギマム「アイヌ人女性」と呼んでいた。非常に能力のあるチャムとして有名だった。病気などがあると彼女に巫術を頼んだ。彼女はニヴフ語を話していた。」⁽³⁷⁾

事例 4

体験談 採録年: 1944年 採録地: 敷香(現ポロナイスク) 語り手: 当時 50歳代の男性K・M氏。(凶事が続いているので)「毎年シャマをやって、山や水の神様に獣や魚を沢山とれるように祈っているのだが、こんなことがつづくと、俺達上村のものは何か神様の気にさわった(神の怒りをかっている)こ

とがあるにちがいない。だから今年は魚も不漁かも知れんし、山の方の獲物運もないと思うんで、いつもより一層大事にお祭をするんだ。そんなんで、オロッコだけれども、シャマのワシカを呼びにやっているんだ。」⁽³⁸⁾

3-2-2 アイヌの伝承における他民族シャマンの事例

事例 5

白浜(現スタロドゥブスコエ。ドリンスク市区)出身。70歳代の女性T・A氏の体験談。

「母方の伯父が多来加にロッピンチョウの卵をとりに行って崖から落ちて死んだ。そのことを知らせるためにオロッコ(ママ)のトゥスクルtusukuruが家族を捜してやってきた。カチヨkacoをたたいてトゥスtusuをしながら来た。近所の人がトゥスtusuをしてくれというと空き缶を腰にぶら下げてトゥスtusuをした。」⁽³⁹⁾

また、「ウイルタ人から巫術を習って来たアイヌ人がいた」という証言もある。⁽⁴⁰⁾

テキスト 12 (梗概)

ジャンル: ウチャシコマ 採録年: 1961~1963年(?) 出身地: 恵須取(現ウグレゴルスク市) 語り手: 当時60歳代の女性F・H氏。

「自分の父親たち(アイヌ人)が若い頃、ニヴフ人を含めたグループで船でリヨナイ近くのヘトナイボというところへ山菜採りに出かけた。山菜を探っていた彼らは浜でネコの化物に遭遇して逃げだした。船から見ると化物は分裂し、たくさん小さな化物が浜辺中に広がっていた。当時父親の家にコシコシという名のウイルタ人女性で強力なシャマンがいた。帰った一行のことで彼女が巫術を行い、無事を神々に感謝した。そして翌日その後どうなったか勇気のあるものが連れだって現場を見に行った。残してきたものはなくなり、化物も何もいなくなっていた(これは語り手の父親の世代の話である)」⁽⁴¹⁾

アイヌにおいては昔話(トウイタハ)ではなく故事來歴譚(ウチャシコマ)にシャマンが登場する。ニヴフにおいても、より実話に近い話にシャマンが登場するなどの傾向がある。アイヌのウチャシコマやニヴフの伝承において「空想かフィクションか」という問いかけは困難であるが、直接の見聞に近い伝承において他民族シャマンとの共存が語られる傾向がある。

なお、山本祐弘による聞き書きでは、1940年代頃当時ポロナイスク周辺ではワシカというウイルタ人シャマンが最も優秀であるとみなされていたことがわかる。さらにニヴフ人であるK・M氏らがケヌヴァン氏族全体の運勢の向上を願ってそのワシカに依頼

した巫術の様子を詳しく述べている。

事例 6

体験談 採録年: 1939~1946年 採録地: 敷香(現ポロナイスク) 語り手: 当時40歳代のウイルタ人男性K・G氏。

「シャマは女も男もある。俺もやるが、ギリヤーク(ママ)のキヨガノも頼まれてよくやる。女だ。今オロッコ(ママ)のワシカが偉いシャマだ。シャマをやると、昔はオロッコ(ママ)なら馴鹿を一頭お礼に出したものだが、今はそんなことはない。ギリヤーク(ママ)なら黄犬を一匹だしたもんだ。」⁽⁴²⁾

3-2-3 他民族シャマンとの共存

他民族のシャマンに関する伝承では、民族間で対立しているかに見える例もある。しかし口承文学中では原則的にシャマンは民族にかかわらず互いに競争相手である。ピウスツキの採録した話では化物退治に複数のシャマンが呼ばれ、技を競い合う。またサハリンアイヌには、東西海岸のシャマンの技比べなどの話が伝わっている。しかし、敵対的ではなく、村に共存している例もある。北部においては、近代になって日本人が介在しているが、同地域におけるアイヌ人とニヴフ人の交流はさらに古くさかのぼると推測される。クギ(=アイヌ)姓を名乗る一族が存在するが、その始祖であるアイヌ人は少なくとも3世代以上前らしい。また「クギマム」と呼ばれたアイヌ人女性もニヴフ語を話していたことから、単なる一時滞在者ではなかったことがわかる。

日本領内でかえって少数民族間の交流が盛んになった可能性はある。例えば敷香(現ポロナイスク)の状況は日本政府の行った集住化によって新しく発生したものかもしれない。しかし来知志(現スタロアインスコエ)に来ていたウイルタ人や、北部のアイヌ人は必ずしも直接の日本人の介在を必要とはしなかつただろう。各民族の文化にはかなり差異がある。生業や葬儀などは大きく違う(他の民族のやり方を奇異とみなしていく、あまり真似ようとしない)。一方でお互いに他民族のシャマンに依頼することが可能である、とみなしている。やはりシャマニズムは共通性が高い分野であり、故に交流が容易だったのではないだろうか。

4. 結論

シャマンに関する伝承には、かつてのアイヌ・ニヴフ両民族間の相互交流が反映している。両民族にとってシャマンの巫術は普遍性を持っており、他民族のシャマンに頼ることがありえた。それらは実際の交流の事実によても裏付けられる。また、この交流は日露によるサハリンの近代化以前から続いていた可能性が高い。今回指摘した以外にも口承文学、その他の文化事象においてサハリン地域諸民族間には交流の痕跡がみられる。しかしシャマニズムにして

も共通性と差異が十分に検証されているとはいえない。今後、より詳細で具体的な比較作業が期待される。ウイルタの伝承中の他民族シャマンの事例については今後の課題としたい。

注

- (1) Tjeerd de Graaf, "The Linguistic Situation In Sakhalin", 『サハリンの少数民族』文部省科学研究費補助金研究成果報告書、1993年 13-32 頁。
- (2) チューネル・M・タクサミ『アイヌ民族の歴史と文化』明石書店 1998 年 71 頁。
- (3) 丹菊逸治・荻原真子編「千徳太郎治のピウスツキ宛書簡」『ユーラシア言語文化論集』4 千葉大学ユーラシア言語文化論講座 2001 年 187-226 頁。
- (4) 黒田信一郎「ギリヤークの世界像とハンセン病-資料の提示-」『ギリヤーク族の社会構造』黒田矢須子 2001 年 235-246 頁。
- (5) 2002 年 7 月ノグリキにて T 氏談。
- (6) 伝統文化・芸能の保存・紹介を行うサークルがサハリン各地にあり活動が盛んである。そこでは太鼓は少年たちの定番の楽器となっている。
- (7) 山本祐弘『北方自然民族民話集成』相模書房 1968 年 104-106 頁。
- (8) 一部は文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」(A)『環太平洋の「消滅に瀕した言語』にかんする緊急調査研究による言語文化調査時の聞き取りによる。
- (9) *Владимир Санги, Нивхские Легенды, Южно-Сахалиск, 1961.*
- (10) 北原次郎太・丹菊逸治他編『樺太アイヌ文化調査報告書』私家版 2000 年 14 頁。
- (11) 北原次郎太・丹菊逸治他編前掲書 2000 年 27 頁。
- (12) 北原次郎太・丹菊逸治他編前掲書 2000 年 29 頁。
- (13) ジャンル分類については、サハリン内でも地域によって多少の差異がある。
- (14) 知里真志保「樺太アイヌの神話」『北方文化研究報告』9 北海道大学 1954 年 221-225 頁。
- (15) 村崎恭子編訳『樺太アイヌの昔話』草風館 2001 年 114-119 頁。
- (16) 金田一京助編『北蝦夷古謡遺篇』甲寅叢書刊行所 1914 年。
- (17) Bronislaw Pilsudski, *Materials for the Study of The Ainu Language and Folklore*, Cracow, 1912, pp.103-110.
- (18) 村崎恭子『樺太アイヌ語口承資料 1』昭和 63 年度科学研究費補助金課題番号 62510266 研究成果報告書 1989 年 95-99 頁。
- (23) 村崎恭子前掲書 2001 年 9 頁。
- (24) カラス同士の対決において巫術が用いられるのは興味深い。北海道アイヌの口承文学においてもカラスはトリックスター的役割を果たすことがあり、むしろカムチャツカ方面との共通性をもつ。
- (25) Bronislaw Pilsudski, *Materials for the Study of The Ainu Language and Folklore*, Cracow, 1912, pp.XVI.
- (26) ここでいう「歴史」はアイヌ人がルルバ譚に比べて近い過去とみなしている、というくらいの意味である。くわしくは Bronislaw Pilsudski, 1912, pp.XV-XVI を参照のこと。ウチャシコマの下位分類については丹菊逸治「サハリンアイヌの口承文学 tuytah の形式について」千葉大学大学院欧米言語文化修士論文 1999 年未刊 を参照のこと。
- (27) 丹菊逸治「藤山ハルの ucaskoma について」『叙事詩の学際的研究』平成 9 ~ 12 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2) 研究成果報告書千葉大学 2001 年。
- (19) Л.Я.Штернберг, *Материалы По Изучению Гиляцкого Языка и Фольклора*, С-Петербург, 1908, pp.21-29.
- (20) Л.Я.Штернберг, 1908, p.24.
- (21) Л.Я.Штернберг, 1908, p.28.
- (22) 高橋盛孝『樺太ギリヤク』大阪朝日新聞社 1942 年 134-135 頁。
- (28) Л.Я.Штернберг, 1908, p.59, p.108, p.114.
- (29) トゥルグシュについては一部が時代が下るにつれてニヴフ人にとっても「真実ではない」と考えられるようになった可能性がある。
- (30) その場合「実際にキツネに化かされた」という「尊」はトゥルグシュではなくケシュと呼ばれる。
- (31) ゲオハトと呼ばれる貧乏人が活躍する話はトウンゲース系諸民族に伝わっている。
- (32) 語り手が主張するところではニヴフ人の伝統社会には集落全体のウズング「支配者」などはなかった。
- (33) 外来の話はサブジャンルをなしていることもある。アイヌの「シサムウウェペケレ」、ウイルタの「サフリ」などの呼称もある。ニヴフにおいては特別な呼称はなく、外来とわかっている場合もトゥルグシュと呼ぶようである。
- (34) 山本祐弘前掲書 1968 年 123-126 頁。
- (35) 山本祐弘前掲書 1968 年 130 頁。
- (36) 高橋盛孝前掲書 1942 年 136-137 頁。
- (37) ノグリキ近郊にかつて日本との合弁会社があった。が、彼女の記憶では他にも漁船が来ていたという)。
- (38) 山本祐弘前掲書 1968 年 243 頁。
- (39) 北原次郎太・丹菊逸治他編前掲書 2000 年 40 頁。
- (40) 北原次郎太・丹菊逸治他編前掲書 2000 年関連の未整理資料から。
- (41) 村崎恭子『カラフトアイヌ語 - 資料篇 -』国書刊行会 1976 年 36-41 頁。
- (42) 山本祐弘前掲書 1968 年 241 頁。